

<北海道熊研究会報>

第 30 号 2014 年 5 月 13 日

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

2013 年 11 月 5 日、UHB 大学主催で、「熊とは、そして、札幌の市街地に熊が出て来る本当の理由」と言う題で、門崎允昭が約 80 分間、道新ホールで 500 名程の聴衆に講演をした際の全文の、今回はその 9 回目として、会報 29 号に続き掲載致します。お読み下されば幸甚です。

[36] 私は 1972 年～今日まで 42 年間分の、札幌圏で捕獲した熊の捕獲地とその熊に関するデータを持って居ます。1985 年（29 年前）迄は、4 月 5 月に定山溪の山奥で、もっぱら越冬穴に居る熊を、胆嚢(熊の胆のことですが)や、子熊を生かした状態で獲ることを目的に獲っていた。それ故に、当時、熊はそこから 12km も離れた藻岩や円山まで徘徊してこなかった。それを 28 年前から止めたために、熊が徐々に東の方に行動圏を広げ、ついに、24 年後の 3 年前には、藻岩や円山で熊の足跡や糞が見つかるようになり、翌 2011 年からは（2 年前）、夜市街地に熊が出て来るようになった訳です。しかし札幌圏での出没熊はいずれも、人に危害を与えていない。札幌圏での 1970 年以降の、熊による人身事故は、2001 年(13 年前)5 月 6 日山菜採りで、定山溪の国有林で、53 歳の男性が 8 歳 3 ヶ月令の雄熊襲われ殺された事件 1 件だけです。

[37] 熊が住宅地に出て来る原因についてお話しします。これは札幌市にも当然当てはまります。

熊の行動には必ず行動を起こす理由と目的があり、それを的確に見極めることが人的経済的被害を予防する上で必要です。

[38] 熊の生活圏である樹林地から住宅地への熊の出没原因は 4 つあります。

一番目は、母から自立した満 1，2 歳の若熊が（自立するのは 5 月から 8 月の間ですが）自分の生活圏を確立すべく森林地帯を探索徘徊していて、(熊は 100%森林に依存している種ですから)林地の端に来て、そこに人家があるのを見て、そこがどう言う所なのか、自分が生活地として、使える場所なのか否か、知りたいという、好奇心を起し、確認に出て来る。母熊と一緒に母熊が人家の在る所に出る事は許しません。札幌市で 2011 年(一昨年)に円山や藻岩の市街地等に、そして 2012 年に藻岩・川沿・真駒内の市街地に等に、それから 2013 年 9 月 25 日から南区に出てきた熊、この熊は 9 月 27 日朝、報道陣に近づく素振りをしたと言う理由

で殺されましたが、これらの熊はいずれもこの種の若熊です。こう言う若熊は本能的に人を避けるために、日没から夜間そして朝方の間に出て来る。納得するまで出沒を繰り返します。

[39] これは住宅地近くの樹林地を生活圏の一部としている若熊にとって、その成長段階として、体験せねばならない掟とも言うべき行動なのです。人間の幼児が道路の横断歩道で、渡り方を大人から習う行為と同じ物なのです。そしてその場所が、自分の住み得る場所で無いことを悟ると、もう出て来ません。ところが、今年の道新の 9/4 付けに、石狩管内のクマの出沒激減と言う記事のり、それに間野勉君のコメントとして、昨年出沒した若い熊が人間を怖いと感じる経験をして、今年は現れなくなったからではと推測する」と言う内容。私はこれを読み、今年はまだ、市街地に、好奇心を起し、学習に出て来る若熊がいらないだけなのに、よくこんなこと言えたものだと感じました。ところが、9月 25 日から南区に熊が出て来た。そして 27 日にその熊は殺されました。この熊は 1 歳 8 ヶ月令の若熊で、今回初めて市街地に出て来た熊で昨年に引き続き出て来た熊ではありません。間野君は先の発言を今どう考えているか私は聞きたいものです。

[40] 滝野すずらん公園でも熊が出て騒いでいますね。この施設は開発局の所管で、熊侵入防止柵として、2 億円も掛けて、目幅 5cm の金網を高さ 3.5m で 7.4km 張ったが、効果が無く、私の助言で金網の上に地上 1.5m から上部に 10cm 間隔で有刺鉄線を張り有効化した経緯があります。今回は間野勉君と民間の調査機関に金をかけて依頼し、まだ熊が侵入した場所も特定し得ていないとの所長の話。だらしない限りです。

[41] さて、札幌の市街地に出沒している熊に付いて、北大の坪田教授や道職員の間野勉君は未だに「人を恐れない新世代熊」と言い、斜里博物館の山中君は「迷い出て来たのだ」と、また坪田君はこの 10/22 の道新に「9 月 25 日に出て来た熊について、豊平川伝い出て来て、迷って帰れなくなったのでは」とコメントし、これを、マスコミは真実として報道し続けて居るのが現実です。私から言えば、彼らのコメントは間違っているということです。人を恐れないならば日中出て来ても良いはずだが出て来ない。迷い出ているならば、同じ熊が何度も出て来る事は無い。また、迷って帰れないなど有り得ない。これは熊の生態を多面的に調査研究していれば解る事です。私が言っていることが正しいのです。その根拠は、出てきている熊の身体の大きさは皆 1.3m 以下です。これは満 2 歳以下で、しかも親からわかれて間もない若熊である証拠です。出て来ている場所の環境、それにその熊の行動から見て、好奇心で出て来ているものです。いずれにしても幾度か出沒を繰り返すと出て来ませんでしょう。要するに、市街地は自分が住む場所でないことを悟り、出て来るのを止めたわけです。ここで大切な事は、この種の熊が人を襲った事例は、全く無いという事です。人を襲う事は無いのです。にもかかわらず、熊の生態に無知な研究者が拘わって居るために適切な対応が出来ず空騒ぎし、ハンターが出て警備し、市民の不安を煽り、殺す必要も無い熊をハンターに殺させているのが実態です。

(了)